うえまち

上町台地界隈の情報紙

顔 一心寺 長老 高口善行 師

2021年3・4月号
号外 2021 3

発行：NPO法人 まち・すまいづくり
発行人：竹村伍郎
TEL&FAX.06-6779-7222
http://www.machi-sumai.com/
uemachi@machi-sumai.com
〒543-0043
大阪市天王寺区勝山1-11-29

二〇二一年 聖徳太子一四〇〇年御聖忌記念

四天王寺

新縁起

第21回

南北朝の動乱と四天王寺

四天王寺 勧学部
文化財係主任・学芸員
一本崇之

激動の時代の中心に身を置いた人々は、自身の目的を達成するため強い信念をもって行動します。ただ、それでも何かにすがりたいというのが人の性です。その対象となったのが神仏であり、そして聖徳太子でした。

南北朝の動乱を描いた『太平記』。同書には四天王寺がたびたび登場しますが、なかでも有名なのが楠木正成の「未来記」披見の逸話でしょう（図1）。元弘2年（1332年。史実では元徳2年＝1330年）、正成は四天王寺に入り、長老の守鶴に太子が著したとされる予言書「未来記」を拝見したいと申し出ました。特別の計らいにより「未来記」を拝した正成は、そこに次の一文を見出します。

人王九十六代に当たつて、天下一たび乱れて、主安からず。この時、東魚来たつて四海を呑む。日西天に没すること三百七十余ケ日、西鳥来たつて東魚を喰らふ。その後、海内一に帰すること三年、獼猴（みごう）の如くなる者天下を掠むること二十四年、大凶変じて一元に帰す。

正成はこれを「後醍醐天皇の世に天下が乱れ、東の魚（関東の幕府・北条高時）が天下を飲みこもうとする。日が西天に没してから（後醍醐天皇が隠岐に流されてから）三百七十余日の後、西の鳥（新田義貞）が東の魚を食らう（倒す）」と解釈し、討幕が果たされて天皇の治天が近いことを確信するのでした（ただし、「未来記」ではそれに続いて、建武の新政が3年で崩壊し、足利尊氏が24年にわたって世を治めた後、凶事が一変してもとの平和に戻ることも予言しています）。

また、建武2（1335）年5月8日には、後醍醐天皇が四天王寺にて『四天王寺縁起』を閲覧しています。太子の本願に感銘を受けた天皇は、手ずから書写して正本とし、「太子の聖跡は何人の目にも触れさせるものではないので、これよりのちは堂内から出してはならない」と奥書にしたためました。そして四天王寺を「仏法最初の霊場、王道擁護の壇場」と評し、朝廷復興のあかつきには、寺領の復興を果たすと誓願して、その想いを手印に込めたのです（図2）。仏教に深く帰依した後醍醐天皇にとって、自身の目指す理想の国づくりが太子の本願にかなうものであったことは、新しい国家を樹立するうえで大きな励みとなったことでしょう。

古の人々にとって四天王寺は、『四天王寺縁起』や「未来記」など聖徳太子ゆかりの品を通して「聖徳太子に出会う場所」でした。時代の転換を主導する立場となったとき、自身の行動の正当性を太子に託して確信し、精神的な支えとする。これもまた聖徳太子信仰のひとつのあり方を示しているのです。

（図1）絵葉書
「楠正成四天王寺ニ於テ士気ヲ鼓舞ス」筆者蔵

（図2）国宝『四天王寺縁起』〔後醍醐天皇宸翰本〕
四天王寺蔵

相羽秋夫の

上町らくご植物園

樹物が登場する落語を取り上げ、演芸評論家の相羽さんならではの面白い視点で読み解きます。

第22折

東京落語「鬼娘」

鰯（いわし）の相方―柊（ひいらぎ）

江戸・慶応年間に、人の子を攫（さら）う鬼娘が出現し、大きな話題になった。それに目をつけた香具師（やし）が、鬼娘の見せ物を出した。それに目をつけた香具師は「もちろん本物です」と答える。「では拙者が調べよう」と身構えると「お侍さんがいらっしゃると鬼が逃げます」「なぜだ」「羽織の御紋が柊（ひいらぎ）ですから」「ならば供の者に調べさせる」「お供の方も鬼が逃げます。お腰の物が赤鰯（いわし）でございます」。

節分の夜に、鰯の頭を柊の枝に付け、門口に刺しておくと魔除けになると、古来より伝えられてきた。この比較的ポピュラーな風習を踏まえたのが、ご紹介した落語のオチだ。もう一つ「赤鰯」というのが、赤く錆（さ）びた鈍刀を嘲笑する隠語であることを知らないと理解できない。柊の葉をデザイン化した紋は、結構使われていた。

クリスマスの装飾に使用する木も柊だと思われているが、柊によく似た『西洋柊』で、正式には「ホリー」という木だ。柊はモクセイ科であるが、ホリーはモチノキ科で科目がまったく違う。

柊は材質が非常に堅く、櫛（くし）・印章・算盤（そろばん）玉・将棋の駒など、我々が日頃よく目にしている物の材料になっている。

冒頭にご案内した節分の夜の風習は、多くの俳句に詠まれている。「烈風の戸に柊のさしてあり」と、烈風の2文字に冬の寒さを表現している。こんな叙しい句もある。「誰も来ぬ戸に柊を挿しにけり」。川柳になると、少し判じ物じみる。「節分の門口（かどぐち）海と山をなし」は、鰯を海、柊を山に例えて、この風習を描く。「一町へ鰯柊後（あと）や先」は、節分のために、鰯だけ売る商人と柊のみを扱う商人が、別々に売りに来たことを教えてくれる。それぞれが商売になったのだから、よき時代だった。

オチに関係のある句もある。「節分の鬼切丸は赤鰯」。源頼光が大江山の酒呑（しゅてん）童子を切った名刀・鬼切丸も、鰯を切るとは鈍刀に等しい。

―「柊」と掛けて愛の囁（ささや）きと解く、その心は節分（接物）に欠かせない。

NPO法人「まち・すまいづくり」活動報告

住まいと暮らしの無料相談会

3月13日（土）・4月10日（土）
各10時～12時

大事なことなのだけど、なかなか日常生活では相談できない住まいと暮らしの「困った！」はありませんか？

住まいと暮らしの無料相談会には当法人会員の弁護士、司法書士、税理士、宅地建物取引士、一級建築士といった専門家が出席。専門知識を生かし、責任を持ってご相談に応じます。

場所：大阪市立社会福祉センター
（大阪市天王寺区東高津12・10）
予約・お問い合わせ：NPO法人
「まち・すまいづくり」（06-6779-7222）

「上町台地名所百景」発売

「うえまち」20年8月号に募集掲載した「上町台地名所百景」を上製の地図にしました。定価は400円（税込）で、大阪歴史博物館のミュージアムショップで販売予定です。お問い合わせは右記・NPO法人「まち・すまいづくり」まで。

WEB「うえまち」

現在、休刊中の地域情報紙「うえまち」ですが、本号外のほか、WEB上でも情報発信を行っています。

①note（ノート）を使った記事の掲載

noteはクリエイターが文章や写真、音声を投稿することができるサイトです。そちらに「上町台地界隈の地域情報紙「うえまち」」のページを開設しました（「ノートうえまち」で検索）。

②フェースブックを使った情報発信

フェースブック上で「うえまち編集局」「うえまち台地界隈情報」の2つを設け、無料相談会やうえまち寄席、地域に役立つ情報なども発信していきます。

上町台地界隈の情報紙

うえまち

推薦 一心寺 長老 森口恭行 師

2021年3・4月号
号外 2021 4

発行：NPO法人 まち・すまいづくり
発行人：竹村伍郎
TEL&FAX.06-6779-7222
http://www.machi-sumai.com/
uemachi@machi-sumai.com
〒543-0043
大阪市天王寺区勝山1-11-29

四天王寺

二〇二二年 聖徳太子一四〇〇年御聖忌記念

新縁起

第22回

正平地震と四天王寺

四天王寺 勤学部
文化財係主任・学芸員
一本崇之

正平16（1361）年6月24日、畿内を巨大地震が襲いました。激しい大地の揺れは日夜とどまることがなく、山は崩れて谷を埋め、海底が隆起して陸地と化し、神社仏閣は倒壊し、計り知れない数の牛馬人民が死傷したといいます。

この正平地震（北朝の年号により康安地震とも）は、いわゆる南海トラフ沿いの巨大地震に当たるもので、畿内はじめ阿波（徳島）、土佐（高知）にも甚大な被害を及ぼしました。なかでも阿波国由岐の港では、にわかに山のような津波が押し寄せ、1700余りの家屋が海底に沈み、住民や家畜に至るまで一人残らず海の藻屑となったと伝えられます（写真は徳島県美波町にある供養塔。ウィキペディアより）。

また『太平記』では、この地震の様子を次のように記しています。

暴風雨で空が暗くなると、雌波浦の沖より2頭の大龍が現れて、天王寺の金堂の中へ入っていった。すると雷鳴がとどろき、雷光がきらめいて、まるで龍と四天王が戦っているかのようであった。龍が去る時、また大地が激しく揺れ、金堂が微塵に砕けた。しかし四天王は無傷であった。これは、聖徳太子ご安置の仏舎利を、龍王が持ち去ろうとするのを、仏法護持の四天王がこれを阻んだものであろう。〔現代語訳：筆者〕

正平地震は、四天王寺金堂での龍と四天王の争いによって生じたというのです。もちろん多分に脚色が入っていますが、それでも悪天候の中、大地が激しく揺れ、金堂が崩れ去る様子が臨場感をもって伝わってきます。

四天王寺は、この地震で金堂が倒壊したほか、五重塔が傾いて九輪が落下するなどして、承仕（寺の雑役を勤める者）ら5人が圧死する被害が出ています。正平地震を語る史料には、必ず四天王寺金堂倒壊のことが記されることから、震災を象徴するような出来事だったのでしょう。

この後、倒壊した金堂は、勅命によって般若寺僧である円海上人が復興することとなりました。般若寺は、四天王寺別当を務めた叡尊や忍性ゆかりの寺であることから、真言律宗と四天王寺との深い関わりがうかがわれます。金堂の再建はかなりのハイペースで進められたようで、同年9月24日には落慶供養が行われています。

南海トラフによる巨大地震は、50年～150年の間隔で発生するといわれており、正平地震のあとには、明応地震（1498年）、宝永地震（1707年）、安政地震（1854年）、昭和の地震（1944年、46年）と続いていきます。このように歴史をたどってみると、昭和地震からすでに75年が経過した現在、巨大地震がいつ起こっても不思議ではないことがよくわかります。

徳島県美波町東由岐にある漂層碑（ウィキペディアより）

相羽秋夫の

上町らくご植物園

植物が登場する落語を取り上げ、演芸評論家の相羽さんならではの面白い視点で読み解きます。

第23話

東京落語「竹に虎」

パンダの好物―竹

画家の酒井米水は、いい胸を持ち世間の評価が高かった。しかし酒が好きで、毎日毎日大虎になって、注文を受けた絵を描こうとしなかった。女房のおみつは、子どもを連れて出ていけば少しは反省してくれると考え、そこは画家の女房、襖（ふすま）に竹の絵を描き、古歌を添えて実家に帰った。翌朝目覚めた米水は、その絵を見て「なんだって竹を描いて行ったのだろう」と首をかしげる。しばらくして「ああそうか。俺が虎になったからだ」。

竹は、蘭（らん）・梅・菊と並んで「四君子」と呼ばれ、高貴で清らかな植物の代表として讃えられる。笹は竹の小振りなもので、観賞用として愛されている。

「竹植うる日」があって、旧暦の5月13日に竹を植えるのがよいとされている。俳句にも「降らずとも竹植うる日は蓑（みの）と笠」の句がある。「竹八月に木六月」は、逆に旧暦の8月に、木は同6月に伐採するとよい、という諺だ。京都の鞍馬寺では6月20日に、五穀豊穣と水への感謝を祈る「鞍馬の竹伐（きり）」が行われる。

「竹を割ったよう」とは、さっぱりした性格の人を指す。また「竹に油を塗る」は、弁舌の達者な人や、若くて美しい人を形容する言葉になる。

「かぐや姫に遭（あ）うかも知れぬ竹を伐る」と竹にはノスタルジーがある。背丈ほどの竹の下から3分の1ぐらいの所に踏み板を施した「竹馬」は、男の子の遊戯の一つだった。プロペラ状に削った竹を回転させて飛ばす「竹蜻蛉（とんぼ）」もなつかしい。この遊びは江戸中期からあったらしい。

「竹細工」に至ってはキリがない。「竹垣」や「竹矢来（やらい）」のような生活に密着したものから、戦中に使った「竹槍（やり）」、あるいは「竹刀（しない）」などの武器にもなる。さらには「尺八」という楽器は、演奏がむつかしいが、音色の哀切さは類を見ない。

しゃれ言葉としては、「竹屋の火事でボンボン言う」と、遠慮なく本音を吐く人に例える。―「竹」と掛けて民謡と解く、その心は、節に特徴がある。

大人のための文章教室

ライター・編集者 松本正行

「思う」が多いと思いませんか？

不都合な点があればお伝えいただければと思います。最後までお楽しみいただければと思っております。

「～したいと思います」「～と思っています」という文はよく見かけます。文末のおさまりがいいからでしょう、筆者もメールなどで知らず知らずのうちに使いがちなのですが、本人にその気がなくても「思う」は断定を避けた逃げの表現。たとえば「A案を進めたいと思います」と「A案を進めます」では、まるで印象が異なりますよね。「思います」では、本当に進める気があるの？　となりかねません。

不都合な点があればお伝えください。最後までどうぞお楽しみください。

「思う」と同じく「考える」も使ってしまいがち。「結果がわかり次第、ご報告したいと考えます」などは、まさに〝ありがち〟で、これも「ご報告します」でいいし、「●●日以内に報告します」とすればより信頼感が増します。

「思う」や「考える」の多用は書き手の評価を下げる――。こうした「あやふやな表現」は文章を見直す時の最重要チェックポイントだ、と心しましょう。

※本連載は「うえまち号外」掲載分以外も、Webで閲覧いただけます（「フート　うえまち」で検索）。

上町台地にある高津高校のOB。1000を超える取材経験をもち雑誌、Webを中心に活動中。NPO法人「まち・すまいづくり」会員。